

『論説資料』について推薦文をご寄稿いただきましたのでご覧ください。

## 『英語学論説資料』について

### ◇ 安井 泉先生（筑波大学名誉教授）

『英語学論説資料』は、昭和44年（1969年）に創刊され、半世紀にわたって、毎年編まれ続けています。逐年刊行物として、今年、第48号（2016年発行）が発行されました。32号（2000年発行）からは、書籍版に加えてCD-ROM版も発行しています。第18号（1986年）からは、英語教育分野で英語の文法等に関係の深そうなものを収録しています。

『英語学論説資料』の中には、各年度に発表された全国の大学の紀要論文がそのままの姿で、小さな書庫として保存されています。ともすれば散逸してしまう論考が、分野別に整然と分類をされて、研究者との出会いをまっています。論文を書こうとしてあたためている漠然としたアイデアは、先人たちの知恵との出会いによって、より洗練され高度なものに磨き上げられるはずです。

CD-ROMの論文検索は、論文題名、執筆者名、キーワードなどを手がかりに50年近くにわたる研究論文を集めた「知の総体」の中から、瞬時に関係する論文を拾い出します。図書館の中で、全国の紀要の冊子をもとめて右往左往するのは、いくら時間があってもとてもできない『スゴ技』をあつという間にやっつけてくれます。先行研究に見落としがあるのではないかという不安もこの作業で瞬くうちに解消できます。

冊子を手にとって開くことにより、研究者たちが、どんな題材に心をときめかせているのかを鳥瞰することもできます。新しい視点へいざなってくれるのは、この寄り道ほど頼りになるものはありません。寄り道こそが近道なのです。

論説資料を手にとるには論文を参照するときだけでなく、思いがけず新たな発想を得ることも繋がります。なるほどという論文は受身でしか読めませんが、自分だったらもう少し別の

考えをするだろうと思わせる論文は、創造や綿密な調査への意欲をかき立ててくれます。関係ないと思っていた題材にこそ、行き詰まりを打開するカギが潜んでいるものです。

図書館の片隅にうすいピンク色の横長の冊子が並んでいる一角を見つけると、ふしぎと懐かしい思いがします。何しろ、半世紀も前から、その一角は図書館にあるのですから。

### ◇ 三輪伸春先生（鹿児島大学名誉教授）

論説資料は独特の存在価値を持つ。研究者用の文献は図書館、書店に行けばいくらでもある。しかし、若い研究者が自分にとってもっとも適した参考文献は何か、ということを実際に考えた場合、ただちに適切な文献に出会えるとは限らない。指導する先生が最適な参考書を教えられるとは限らない。専門化すればするほど先生の関心と自分の関心がびたりと一致するとは限らないからである。

和辻哲郎が当時台頭してきたキルケゴールの本を拝借するためにある先生を訪ねたところ、貸してくれたついでに内容についての説明があった。しかし、その説明は当を得ていなかった。英語学関係の訳書もたくさんある。しかし、注意しないと誤訳は意外にたくさんある。参考文献の解説文もよく見かける。しかし、解説者自身の理解が間違っている場合がよくある。国内で、大正以降の英語学関係書で絶版になっている名著の複製版が出版されたことがある。しかし、それはごく近代の書物であるにもかかわらず初版でなかったり、現在でも入手できる書物あるいは誤訳の目立つ書物であったりした。それでは害をなすこともある。資料というものはその本質上、初出でなければならない。

『英語学論説資料』は、著者自身が発表したままに写真複製したものである。これなら間違いない。著者自身が書き、校正を加えたそのままかたちになった本資料で勉強することができ

る。毎年、国内で発表される論文は数え切れない。いかにインターネットの発達した現代でも、そのすべてを博覧して閲覧することは不可能である。図書館で『英語学論説資料』を検索すれば、原作者の息吹の伝わる唯一無二の原典にお目にかかれる。研究者を目指す人は、この宝の山を目の前にしているのである。もちろん、そのすべてが優れた論文ではないであろう。玉石混淆の中から自分の一生の研究の方向を決めるかもしれない論文を見いだす眼力を持っているかどうか資質が問われる。そのこと自体が勉強である。そういう機会を与えてくれるのが『英語学論説資料』である。

## 『日本語学論説資料』について

### ◇ 田中章夫先生（元学習院大学教授）

戦後二十年、昭和四十年代を迎えるころ、それまでは、あまり恵まれてこなかった国語国文学界にも、学科の創設・増設があいつぎ、おびただしい数の学会誌・研究誌・研究紀要の類の創刊・増刊が続いた。それは好ましいことには違いないが、大学・研究所の研究室も図書室も、その整理に大重という状況だった。特に、教育学部・教養学部・外国語学部などの紀要類となると、国語国文学とは縁遠い、哲学・物理学・西洋史から・体育学・広東語・ヘブライ語などの論考の中に、国語国文学の論文が二つ三つということになる。短大の研究誌では、家政・服飾・保健などの論の中に、工業高専には、当然のことながら理工系の論と同居している。その上、この種のものの多くは、執筆者自身からの寄贈なので、定期刊行物として扱えない。国立国語研究所の図書室の係が、大学などに問い合わせたところ、「一定期間展示後廃棄」「お持ち帰り自由」扱いが多かったという。しかし、これはなんとしてもモッタイナイ！ 掲載論文

の多くが、若手研究者の手になるもので、処女論文も少なくない。研究室が苦勞して手に入れた、貴重な資料の紹介や、老大家の業績紹介も見られる。

その散逸を憂慮して、当時、国立国語研究所におられた、宮島達夫・徳川宗賢の両氏が、中国語研究など、中国関係の研究誌の論文を集めた『中国関係論説資料』の編集・刊行を手がけておられた、「北辰」社の向坂正一氏に、国語学関係の「論説資料」作成の相談を持ちかけた。学界の落ち穂拾いのようなもので、どう考えても採算が取れるものとは思えない。にもかかわらず、とにかく「ヤツテミヨウ」ということになったそうである。幸いなことに、国語関係の話題や論文については、国立国語研究所の『国語年鑑』に随筆・随想の類まで、題名・掲載誌名・ページなどが網羅的に集められている。その上、掲載誌のほとんどは、研究所の書庫に収納されている。したがって、中国語関係に比べて、資料収集の労力・費用・期間が大幅に軽減される、この点が、一つの決め手になった由である。

しかし、大きな問題は、原文の執筆者に、転載の許可を得ることである。各種の「～論説資料」なるものが版を重ね、その性格が周知されていけば、ともかく、先輩の「中国関係～」が出たばかりの頃である。国語畑の人々に「論説資料」への掲載を持ちかけても、すんなりと、お許しをいただけるとは、とても考えられない。そこで、『国語学論説資料』発刊の意義と、転載許可への協力を依頼する文書に、当時の国語学会理事（現・旧）の、つぎの先生方のお名前を連ねて、

今泉忠義・岩淵悦太郎・佐藤喜代治・  
中田祝夫・浜田 敦・平山輝男・  
藤原与一・松村 明

転載許可の依頼状を送った。ほとんどの方から、許可をもらえたが、当初は数人の執筆者から「不許可」の返信があった。

創刊当時の編集には、宮地裕・宮島達夫・徳川宗賢の三氏が携わり、第二号から、宮地氏の大阪大学教授就任に伴い、田中章夫に代わり、しばらくは、宮島・徳川・田中の三人体制が続いたが、その後は在京の研究者が、次々に参加し、延べ数十人が、全くの手弁当で編集に当たってきた。

本年刊行の第51号で、半世紀超えとなるわけだが、当初は『国語年鑑』の文献カードに基づいて、後には国立国語研究所のデータベースを資料にして、国語国文学の専門誌や専門研究機関の論集・研究報告所載のものを除いて、掲載候補を選び出して、スペースの許す限り採用していった。

1990年刊行の第25号からタイトルを『日本語学論説資料』に改め、この間、「北辰」社の方も、向坂正一氏のご逝去のあとを継いだ、美和子夫人も亡くなり、現在、福岡在住のご子息・向坂成夫さんが継いでおられるが、東京の論説資料保存会の実務は常盤浩行氏によって運営されている。

特筆すべきは、1990年代に、向坂成夫氏・常盤浩行氏の手で進められた『日本語学論説資料』の電子化の動きである。1992年に筑波大学で開催された国語学会春季大会で、『フロッピー版・国語学日本語学論説資料索引』の、1999年に名古屋大学で開かれた国語学会秋季大会では『CD-ROM版・日本語学論説資料索引』デモンストレーションを開催し、その後も数年にわたって、日本語学会の会場で、デモンストレーションを繰り返した。さらに、2003年には、荻野綱男氏・真田信治氏・熊谷康雄氏・中野洋氏の手で、『CD-ROM版・計量日本語学集成』の刊行を見た。

以上、『国語学論説資料』の誕生から『日本語学論説資料・51号』への、半世紀を超える足跡を、大急ぎで振り返ってみたが、「北辰」社と「論説資料」については、2009年9月号の『国文学・解釈と鑑賞』誌に、特別寄稿「『論

説資料』の思い出(宮島達夫・田中章夫)」がある。くわしくは、そちらを参照されたい。

#### ◇ 杉戸清樹先生(国立国語研究所前所長)

「え、こういう本が出ていたのか」。書店や図書館で書棚を見ていて、思わずつぶやくことがあります。新聞やインターネットの出版情報には人並みに気を付けているつもりですが、それでもこのつぶやきはしばしばです。

これと同じようなつぶやきを、研究の仕事で専門領域とと思っている分野の研究論文についても経験します。私の場合、それは、『日本語学論説資料』の目次を見ているときに頻繁です。専門領域だと思っているだけに、その存在を知らなかった論文に遭遇するというのは由々しきことです。単なる驚きのつぶやきでは収まらず、反省・自責というべき思いを経て、読むべきだった論文に出会えた安堵感や喜びにつながります。

ひとくちに日本語学と言っても、関係する雑誌や紀要の数や、そこに発表された論文の数は大変なものですから、その一つ一つの現物を手にとって漏れなく追いかけるのは極めて困難です。その困難さは、インターネットに公開された雑誌・紀要や研究論文の電子情報についても同じことです。一人の研究者の手に負えるものではありません。

もどかしさや不安とも言うべき研究者のそんな困難を『日本語学論説資料』は大きく減らしてくれます。そこには、大学・研究機関・出版社から出る雑誌や紀要などに発表された数多くの論文の本文が、縮写される場合はあっても基本的に元の姿で収録されています。論文は、国語史・文法・語彙・文字表記・音韻・方言などの分野に分類され、横長判型で薄緑色表紙の分厚い5分冊となり、2000年以降は同じ内容がCD-ROMに納められてもいます。上で触れた「目次」は、掲載誌・著者名などの詳細な情

報を備えていて、単に印刷物の目次としてだけでなく電子化され検索も可能な「収録論文一覧」としても用意されています。

私にとって『日本語学論説資料』は、あることができない雑誌、そこに掲載されていたためにひよっとしたら読まずに過ごしてしまったかも知れない論文、そういう論文に、単に書誌情報だけでなく、本文の内容・姿そのまま出会わせてくれる、大切な拠りどころです。

もちろん、ここには、もっと広く知られた雑誌に載った数多くの論文も、繰り返しますが本文が元の姿で、さらに言えば紙媒体に印刷された姿で、一覧できます。先行研究からの積み重ねが求められる研究という営みにとって、それを志し始めた学生・大学院生のころからも含めて、きちんと向き合っ親しみ続けることが欠かせない資料です。

こうした資料が刊行され続けるためには、論文の発掘・選定や編集・刊行にあたる方たちのご苦労とともに、それぞれの論文の執筆者の方からの著作権にまつわるご理解とご協力が欠かせないに違いありません。そのことを忘れず、『日本語学論説資料』がさらに充実して持続することを心から願っています。

#### 『中国関係論説資料』について

#### ◇ 磯田照文先生(東北大学名誉教授)

今日、大学、研究所などの教育・研究機関で刊行される研究紀要、報告は、文系、理系を含めて膨大な数に昇り、一個人が、一分野に限っても、網羅的に眼を通すことなど不可能に近いと思う。

日本語学(旧 国語学)、英語学、中国関係の『論説資料』シリーズが、大きな価値・力を発揮するのは、此の時である。

私は、インド・チベット仏教史を研究分野としているので、シルクロード、敦煌学を含めて、所謂、シナ学の分野は、研究論文、調査報告などで少しでも近づくこととするのであるが、この『中国関係論説資料』は、創刊以来50年間に亘る専攻論文を、切れ目なく検索・参照できるので、本当に有り難い事であると思う。

各年度ごとに、『中国関係論説資料』と「収録論文一覧」が刊行されるが、全体は、

第1分冊(哲学・宗教) 上・下・増刊

第2分冊(文学・語学) 上・下・増刊

第3分冊(歴史・政治・経済Ⅰ) 上・下・増刊

第4分冊(歴史・政治・経済Ⅱ) 上・下・増刊

よりなる。私は、先ず、「収録論文一覧」を通覧するのが楽しみである。

歴史的にも、地域的にも、とてつもなく長く広い領域を持ち、関わる分野の研究業績をこの様な形で利用できるのである(2000年からは、CD-ROMの利用も可能となり、有用性を増した)。

創始者であられる向坂正一さんが、熱い信念のもとに、掲載の許可などにも大変な労苦を重ねられて、昭和40(1965)年に創刊なされた当時のことは、私の恩師(羽田野伯猷先生)が、向坂さんの旧制四高時代の先輩ということもあって親交を持たれていたもので、私も先生から側聞していた。

当時、研究室で進めていたチベット仏典研究叢書(梵/蔵・漢対照テキスト)の出版の際には、『楞伽経』、『瑜伽師地論菩薩地』の漢訳の写植は全て、向坂さんに打ち出しいただいた。此のことは、今でも心から感謝申し上げたい。

#### 論説資料保存会

〒173-0036 東京板橋区向原3-10-2 機北辰内

TEL 03-3554-1651 FAX 03-3554-1734

<http://www.ronsetsu.co.jp>